

保育所年長児のKFDにおける活動内容の分析

武藤久枝* 加藤孝正**

Actions in Kinetic Family Drawings by Six-Year-Old
Nursery School Children

MATSUO-MUTO Hisae KATO Takamasa

要 約

本研究は、幼児期の動的家族画（Kinetic Family Drawings、KFD）の特徴に関する実証的知見を得ることを目的としている。保育所年長児249名に対して集団でKFDを実施した。そのうち、本人を含めて2名以上の家族が描かれた160名のKFDについて、1）家族像、2）描画水準、3）活動内容を分析した。その結果、1）男児は女児よりも父親像を、女児は男児よりも母親像をそれぞれよく描いていて、同性の親を描く割合が高かった。2）KFDの描画水準では、約6割が記念写真型であった。また、女児の描画水準は男児よりも高かった。3）KFDに描かれた活動内容は、「散歩」「遊ぶ」「TVを見る」の順であった。女児の方が男児よりも「遊ぶ」の出現が多かった。先行研究に比べて、活動内容では「散歩」「遊ぶ」が上位を占めることが特徴であった。また、KFDには性差が示唆された。

キーワード：動的家族画（KFD） 活動内容 年長児

I. 問題と目的

動的家族画（Kinetic Family Drawings：以下、KFD）は、「あなたの家族が何かしているところを描いてください」との教示のもとに実施する投映描画法であり、Burns & Kaufman (1972)¹⁾によって考案された。家族画は何種類かに分かれていて、その教示は概ね「家族を描いてください」「あなたの家族を描いてください」「あなたの家族が何かしているところを描いてください」の3種類である。KFDは他の家族画と比べて、人物に動きを導入することによって家族成員間相互の力動的関係を把握するところに特色がある。投映描画法のなかでもとりわけ、KFDの特徴として、第1にクライアントからみた家族関係を力動的に把握できること、第2に包圍

と区分化などのスタイルの分析が挙げられる²⁾。家族の問題を把握したいが家族間葛藤があって臨床場面では言語的表現が難しい状況や家族の問題に本人も気づいていない場合に有効である。したがって、その適用範囲は、医療での臨床診断、教育での相談、司法における家族の分析など、成人の心理臨床場面でよく用いられている。

子どものKFDに取り組む場合、描画の発達過程と関連させた検討が必要と考えられる。定型発達の子どもの描画行動は18ヶ月頃から始まるスクリブル（なぐりがき）が2歳6ヶ月頃まで続き、その後、2歳6ヶ月から4歳台の象徴期、5歳から8歳までの図式期を経て、それ以降の写実期、完成期に至る³⁾。日本では子どものKFDの発達過程や発達的变化についての研究はほとんどみられないためにその知見も明らかでない中で、KFDの発達段階について描画の発達過程に沿った整理⁴⁾が行われている。それによれば、第1段階は「錯画期：1歳6ヶ月から2

* 現代教育学部幼児教育学科

** 同朋大学

歳6ヶ月頃」であり、家族個人を点または短い線で描くこと、描きながら人物を命名することが主な特徴であり、また、画面の中心の重要な位置に母親等の大切な人を描くことから、この時期のKFDを解釈する場合には、描き手である幼児と描かれた家族成員との関係性が重要と考えられている。第2段階の「象徴期：2歳6ヶ月から4歳頃」では、家族個人を円や渦巻き模様で表現するようになること、人物の区別が明らかになること、人物の動きや役割も表現するようになることが特徴であり、第3段階の「図式期：5歳から8歳頃」では家族成員の動作と表情が明確に描かれ、感情表現も明らかになり、自己の存在を意識して描かれ始めるため、大人のKFDとよく似た形式の描画を描けるようになる。幼児期後期にはじまる第3段階の特徴として、第1は、自己と対峙した表現が記念写真型のKFDとして多くみられること、第2は、基底線や雲、空、透視画カプセル等の区分化が出現してスタイルが多いこと、第3は、この年齢以降、区分化がKFDに登場すること、第4は自己を画面の中心にやや大きく描く、自己中心的であること、の4点が挙げられている⁴⁾。第3段階以降では、第4段階の写実の黎明期（8歳から11歳）、第5期の写実期（11歳から14歳頃）、第6段階の完成期（14歳から18歳頃）に至るが、写実期以降では投映描画法としての意味をもつようになる⁴⁾。以上、KFDの6段階の特徴については統計的資料に基づいていない点に検討の余地がある⁴⁾ため、実証的資料に基づいた知見が望まれる。

症例の臨床報告を除くと、子どものKFD研究においては分析指標の出現率等に関する実証的研究は約25年前に報告⁵⁾されて以来、近年では、小学生、幼児を対象とした研究⁶⁾⁷⁾⁸⁾がわずかに取り組まれたに過ぎない。とりわけ、幼稚園児と小学生を対象とした検討⁶⁾からは、女児の描画水準は男児よりも高いこと、および、幼児のKFDは人物投映の要素が低く、思春期以降の大人の投映的解釈は当てはまらないとの知見を得ている。現代の家族関係が変化している影響を受けて、従来のKFDに比べて最近の子どものKFDが変化している可能性も考えられることから、近年の資料を収集した実証的研究を行う必要がある。

以上から、本研究では、年長児のKFDの特徴に

関する実証的知見を得ることを目的とする。そのためには、KFDの代表的な分析指標「人物像の行為」「スタイル」「シンボル」「人物像の特徴」「KFDグリッド」⁹⁾を用いて幼児における出現率を検討する必要がある。このうち本研究では、その第1報として、年長児のKFDにおける1)家族像の描出、2)描画水準、3)人物像の行為（以下、活動内容）の分析に焦点を当てて解明することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 実施方法

(1)実施方法

保育所年長児クラスにおいてKFDを通常の教示¹⁰⁾にしたがって、クラス担任が集団または個別で実施した。A4画用紙の裏面に家族の人数を本人または担任が記入した。それを家族人数とした。

(2)説明と同意

描いたKFDを担当以外にみせてもいい場合は用紙の裏面に○を、拒否する場合には×を書くことによって子ども本人の同意を得た。研究の趣旨と手順の説明文を園内に掲示することによって保護者の了解を得た。併せて、希望者に対しては描画の説明や相談に応じる旨を記述した。

2. 実施時期

2011年11月から2012年1月

3. 収集資料と分析資料

(1)収集資料

6ヶ所の保育所年長児クラスから249名のKFDを収集した。男児123名(49.4%)女児126名(50.6%)であった。

(2)分析資料

収集資料のうち、B4サイズの画用紙に描かれた44名、および人物像の間柄不明、人物が描かれていない場合などの45名の合計89名を除いて、本人を含めて2名以上の家族が描かれた160名を分析対象とした。以下、160名分のKFDを分析資料とする。

4. KFDの分析

加藤の基準⁹⁾にしたがって分析資料を整理した。

本研究では、1) 家族像の描出を分析するために「描かれた人物の人数」、「描かれた家族像」、「家族像の省略」を、2) 描画水準を分析するために「KFD の描画水準」を、3) 人物像の行為を分析するために「活動内容」を、それぞれ分析指標とする。

(1) 家族像の描出

分析資料に間柄が記入されている場合を集計した。間柄は記入されていないが、名前や他の家族の様子から子どもと判断された場合は「間柄不明の同胞」とした。祖父母以外に、「おじ、おば」などが描かれた場合も家族とした。

家族像の省略は、用紙裏に書かれた家族人数と描画の人数、記入された間柄などから判断した。家族が全員描かれている場合、省略が明らかな場合、不明な場合に 3 分類した。

(2) KFD の描画水準

先行研究⁶⁾を参考にして、本研究では KFD の描画水準を以下の水準 A、B、C の 3 段階に設定した。水準 A は、人物像が完全に描かれている段階、および人物像の一部が欠損している状態ではあるが自分を含めて家族像が描かれている段階、水準 B は、用紙の裏面等に記述してある活動内容が絵からは読み取れない段階、水準 C は活動内容が絵から読み取れる段階である。分析資料を描画水準 A、B、C に分類した。

(3) 活動内容

実証的資料の収集の立場にたっているため、出来る限り、本人の表現にしたがって分類した。「○○しているところ」などと用紙の裏面等に本人が直接、記入した表現、本人の表現を担当がそのまま書いたとみられる表現を生かしてカテゴリーを設定・集約した。たとえば、「花の水やり」「犬の散歩」は「散歩」カテゴリーに、家族で行ったピクニックや遠足は「遠足」カテゴリーに含めた。

5. 統計的処理方法

(1) 単純集計

「描かれた人物の人数」、「描かれた家族像」、「家族像の省略」、「KFD の描画水準」、「活動内容」の 5 項目について集計した。

(2) クロス集計

上記 5 項目について性別、月齢別にクロス集計を行って、セル内 5 以上出現した場合に χ^2 検定を行った。月齢別の区分では分析対象の年齢を 3 ヶ月毎に 4 区分 (69～72 ヶ月、73～75 ヶ月、76～78 ヶ月、79～81 ヶ月) した。

分析には、SPSS (Statistical Package for the Social Science) 解析ソフト (第 17 版) を用いた。

III. 結果と考察

1. 分析対象の性別と月齢

分析対象 160 名の平均月齢は 75.3 ヶ月 (SD = ± 3.50) であった。性別は男児 80 名 (50.0%)、女児 80 名 (50.0%) と同数であった。性別、月齢別の分布を示す (表 1)。

2. 家族像の描出

(1) 描かれた人物の人数

本人を含めて描かれた家族像の平均は 3.75 名 (SD = ± 1.63) であり、その内訳は、4 名 (50 名: 31.3%)、2 名 (39 名: 24.4%)、3 名 (33 名: 20.6%)、5 名 (20 名: 12.5%)、6 名以上 (18 名、11.2%) の順であった。

(2) 描かれた家族像

父親像を描いた者は 116 名 (72.5%)、母親像を描いた者は 117 名 (73.1%) とほぼ同数であった。1 人でもきょうだい像 (兄弟、姉妹、絵から不明同胞と推定したものを含む) を描いた者は 112 名 (70.0%) であり、1 人でも祖父母像を描いた者は

表 1. 性別、月齢別の対象児の分布

月齢	数字は人数 (%)				合計
	69～72 ヶ月	73～75 ヶ月	76～78 ヶ月	79～81 ヶ月	
男児	19(23.7)	20(25.0)	17(21.3)	24(30.0)	80(100.0)
女児	22(27.5)	23(28.7)	17(21.3)	18(22.5)	80(100.0)
合計	41(25.6)	43(26.8)	34(21.3)	42(26.3)	160(100.0)

17名(10.6%)であった。

有意差の認められた性別のクロス集計結果を示す(表2)。男児の方が、女児よりも有意($\chi^2 = 4.51$ 、 $p < .05$)に高い割合で「父親像」を描いた。これとは反対に、「母親像」では女児の方が男児よりも有意に高い割合($\chi^2 = 3.84$ 、 $p .05$)で描いた。

(3)家族像の省略

家族の人数が不明な場合(52名、32.5%)もあるが、省略の明らかな場合(63名、39.4%)が全員が描かれている場合(45名、28.1%)を上回った。性別、月齢別のクロス集計では有意差は認められなかった。

家族像の描出を考察すると、第1に、分析対象では同性の親を描く割合が高かった。この要因として、分析対象は同性の親を同一視の対象としてとらえ始めている可能性が示唆される。先行研究において、同性の親に対する同一視は、KFDの描画順位や人物像の大きさに反映されるとの報告があり、その時期について、5歳児に比べて小学1年生で認められる⁶⁾、あるいは4～6歳ですでに認められとくに男児では顕著⁵⁾などの知見がみられることから、本研究の要因としても時期的に妥当と考えられる。第2に、家族像の描出は人物像の省略とも関連すると考えられる。小学生を対象とした先行研究⁷⁾では、人物像の省略が約10%にみられるが、これに比べて本研究では、幼児期のためか、あるいは教示が十分にいきわたらなかったためか、家族像の省略が高率であった。この年齢の子どもが、家族像を描くためには本人が家族のイメージを十分にもっていたかどうかとも影響すると考えられる。また、別の要因とし

て、不安定な家族形態や単親家族の影響もあって家族の省略が高率だったのかもしれない。

3. KFDの描画水準

描画からは活動内容が読み取れない段階の水準B(100名、62.5%)の出現率が最も高く、描画から活動内容が読み取れる段階の水準C(45名、28.2%)、家族像の描出が可能な水準A(15名、9.4%)と続く。

水準A、水準B、水準Cの性別、月齢別のクロス集計を行った。その結果、性別の検討では有意傾向が認められ、女児(水準A：7名、8.8%：水準B：44名、55.0%：水準C：29名、36.2%)の方が男児(水準A：8名、10.0%：水準B：56名、70.0%：水準C：16名、20.0%)よりも描画水準が高い有意傾向を示した($\chi^2 = 5.26$ 、 $p < .10$)。水準Bを示した男児の出現率は女児よりも高く、水準Cを示した女児の出現率は男児を上回っていた。月齢別の検討では、有意差は認められなかった。

描画水準に性差が認められ女児の方が高い有意傾向を示したとの本研究結果は、5歳児では女児の方が男児に比べて描画水準が高い知見⁶⁾と一致した。また、分析対象の約6割が描画水準Bであったが、これは、たとえば、「走っているところ」などといった動的要素の高い行動についても記念写真の形式のように用紙の正面から対峙するような家族像を1列に描く子どもが多かったことを示している。この年齢の特徴ではなかろうか。

表2. 性別にみた家族像を描く割合

	数字は人数(%)				
	男児(%)	女児(%)	合計(%)	χ^2	p
父親像	64(80.0)	52(65.0)	116(72.5)	4.51	*
母親像	53(66.3)	64(80.0)	117(73.1)	3.84	*
1人でもきょうだい像	52(65.0)	60(75.0)	112(70.0)	1.91	-
兄弟像	22(27.5)	32(40.0)	54(33.8)	2.80	-
姉妹像	29(36.3)	25(31.3)	54(33.8)	0.45	-
兄姉像	27(33.8)	36(45.0)	63(39.4)	2.12	-
弟妹像	22(27.5)	19(23.8)	41(25.6)	0.30	-
1人でも祖父母像	6(7.5)	11(13.8)	17(10.6)	1.65	-

セル内5以下の場合は一と表示 * $p < .05$

4. 活動内容

(1)単純集計結果

KFDに描かれた活動内容を14カテゴリーに分類した。

(2)性別、月齢別のクロス集計結果

活動内容14カテゴリーを性別、月齢別にクロス集計して、セル内5以上の出現の場合に χ^2 検定をした。性別で有意差が認められたカテゴリーは、女兒は男児よりも「遊ぶ」の出現が高かった($\chi^2=6.14$, $p<.05$)。月齢別による違いは認められなかった。有意差の認められた性別の出現を示す(表3)。

(3)代表的描画例

14カテゴリーの中で、出現順位が上位1～3位と比較的高い出現率を示した「散歩」、「遊ぶ」「TVを見る」についてその代表的な描画例を取り上げる。

①「散歩」

「散歩」は性別、月齢を問わず第1位に高率に出現した。身近な外遊びを「散歩」として表現していると考えられる。従来の先行研究では、出現率の低い活動内容であり、本研究においてこのような結果となったのは幼児の描いたKFDであることに起因しているのかもしれない。

図1は6歳1ヶ月の女兒が描いた。家族で「どん

ぐりをひろに行った」と表現された場面である。紙面一番右側端に父親像が最も大きく、そして最も高い位置に描かれている。6人家族のほぼ中央に本人像が比較的大きく描かれている。本人像の隣には、妹とみられる女兒3名が描かれているが、名前のみ描かれていたので間柄不明とした。全員の衣服にハートや星などの装飾が描かれているのも、女兒に多くみられる特徴である。また、どんぐりが基底線として用いられている。

②「遊ぶ」

出現率が第2位であった。また、先述したように女兒の「遊ぶ」は男児よりも有意に多かった。小学校低学年のKFDにおいて「遊び」は父親像、母親像、本人像のいずれにも共通して1～2位と順位が高かった結果¹¹⁾と本研究とはよく似た結果を示した。本研究の分析対象が年長児であり、描かれた遊びの内容を細かく説明する言語能力や描きわけの描画能力が不十分な発達段階であるため、父親、母親、本人ともに共通した家族の活動内容を「遊び」というまとめやすい表現として使っている可能性が考えられる。

図2は5歳9ヶ月の女兒の描画である。「お庭で遊んでいるところ」と表現されている。自己像は紙

表3. 性別にみた活動内容

				数字は人数 (%)	
	男児 (%)	女兒 (%)	合計 (%)	χ^2	p
1 散歩	11(13.8)	16(20.0)	27(16.9)	1.11	—
2 遊ぶ	6 (7.5)	17(21.3)	23(14.4)	6.14	*
3 TVを見る	12(15.0)	10(12.5)	22(13.8)	0.21	—
4 家事作業	11(13.8)	2 (2.5)	13 (8.1)	—	—
5 食事	7 (8.8)	5 (6.3)	12 (7.5)	0.36	—
6 戸外スポーツ	5 (6.3)	5 (6.3)	10 (6.3)	0.00	—
7 球技	7 (8.8)	3 (3.8)	10 (6.3)	—	—
8 ブランコ	3 (3.8)	5 (6.3)	8 (5.0)	—	—
9 買物	3 (3.8)	4 (5.0)	7 (4.4)	—	—
10 遠足	5 (6.3)	1 (1.3)	6 (3.8)	—	—
11 料理	2 (2.5)	2 (2.5)	4 (2.5)	—	—
12 旅行	0 (0.0)	2 (2.5)	2 (1.3)	—	—
13 ドライブ	0 (0.0)	2 (2.5)	2 (1.3)	—	—
14 寝る	1 (1.3)	1 (1.3)	2 (1.3)	—	—

セル内5以下の場合は一と表示 * $p<.05$

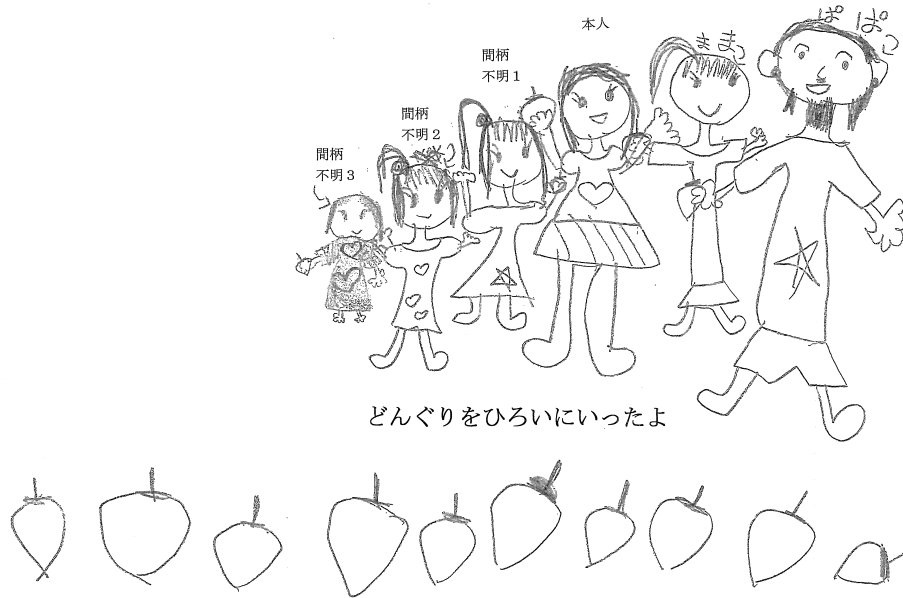


図1.「散歩」の例（6歳1ヶ月：女兒）

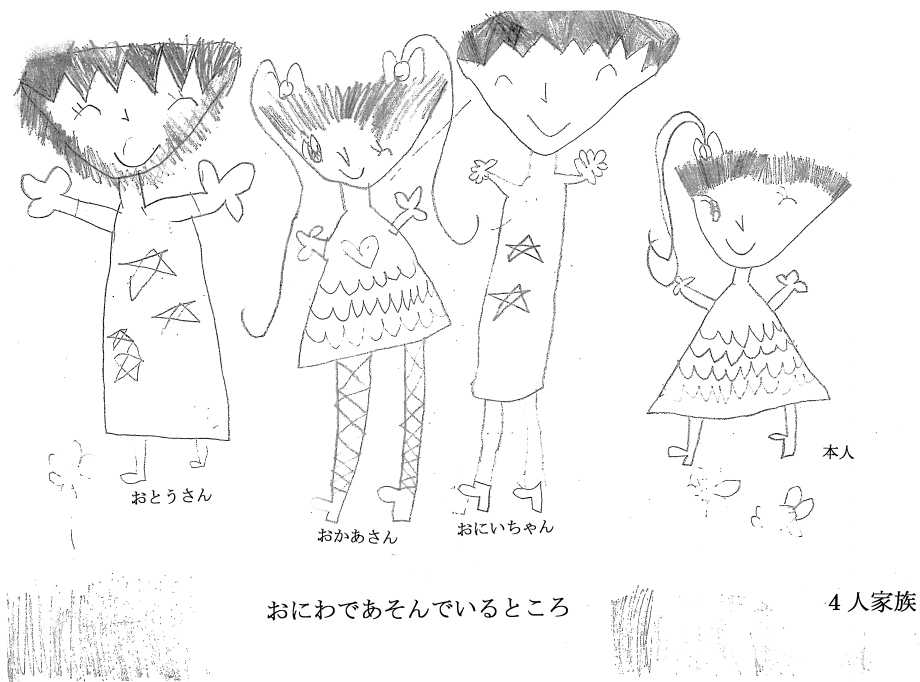


図2.「遊び」の例（5歳9ヶ月：女兒）

面の右端に小さく描かれている。紙面中央には母と兄が描かれている。全員の衣服にハートや印などの装飾が描かれている。また、地面には基底線として花や草が描かれている。母親像と本人像とは、髪型およびリボンで飾られている点が同じである。

③「TVを見る」

本研究では出現率が第3位であった。「TVを見る」は従来、KFDの活動内容の第1位を占める重要

な活動であった⁵⁾¹²⁾が、本研究では、第3位と順位が下がっている。従来の実証的研究⁵⁾において、1973年から1974年にかけて収集した4～18歳の健康な子どものKFDのうち、男児、女児いずれも父親像509名の活動内容の第1位は「TVを見る」であり、TVを見ている父親像は休憩をしている自然な姿として表現されていること、また、女児の描く母親像524名や男児・女児の自己像528名では共

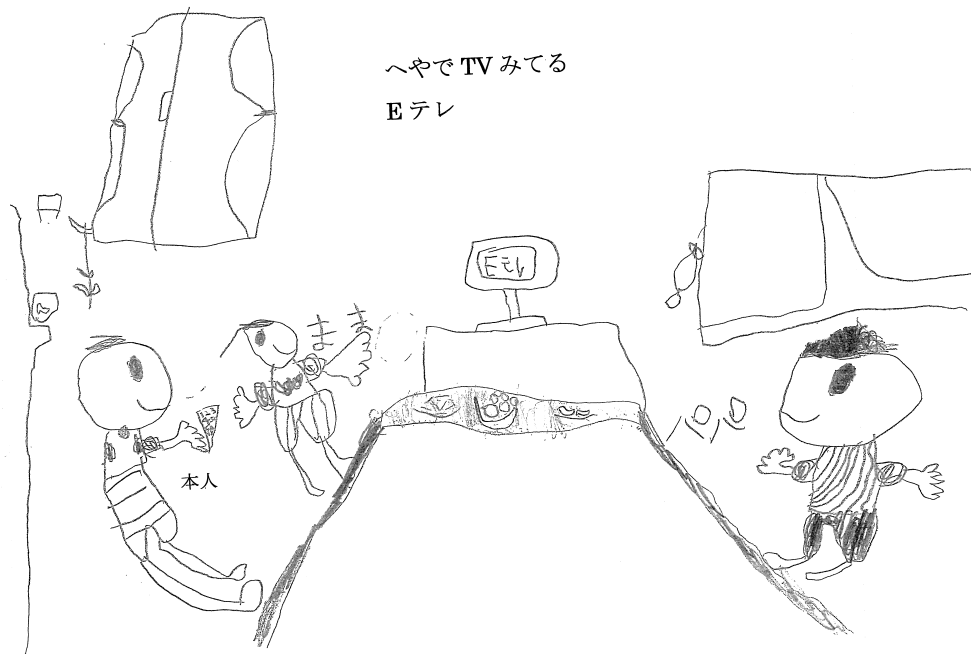


図3. 「TV を見る」の例（6歳5ヶ月：男児）

通して第1位を占めていた。しかし、この知見は近年では変化して、小学生を対象とした報告¹³⁾において先行研究⁵⁾¹²⁾の家族像の活動内容と比較した結果、母親像や本人像では「TV を見る」順位が約25年前よりも下がったことと、その原因としてTVが団欒の象徴ではなくなり、受動的な時間の過ごし方を象徴している可能性を指摘している¹³⁾。近年、KFDの活動内容が変化していることは思春期等の他の年代にも当てはまる結果であるのかどうかについて検証する必要がある、今後の課題である。

図3は6歳5ヶ月の男児による「TV を見る」の例である。居間とみられる部屋で「TV みてる、E テレ」と本人が記述している。紙面中央にコタツが置かれ、その中央にTVが正面を向けて描かれている。TVをとり囲む形で「パパ」「ママ」「自分の名前」が書かれている。

活動内容を考察すると、「散歩」「遊ぶ」といった動的要素のある行為の中で複数の人物が同時に体験を共有できる活動内容が選ばれている。一方、「TV を見る」は、この2つに比べて比較的動的要素の少ない活動であるが、3カテゴリーいずれも、日常のごく身近なことが活動内容として意味づけられて描かれている。

また、先行研究の活動内容で、従来、上位を占めてきた「食事」「料理」の順位が本研究では低かった。

この要因として、本研究のKFDは幼児が描いているためその関心が先行研究における他の世代と異なっているかもしれない可能性や現代では、家庭の中での過ごし方が従来と変化している可能性が考えられる。この点は今後の課題としたい。また、たとえば、「みんなでお散歩している」「みんなで遊んでいる」「TV を見ている」など家族像が同じことを一緒にしているという表現にとどまっている。これについては、家族全員が別々の活動をしていても一緒に同じ活動をしていると理解した可能性の他に、家族の活動内容を個人別に記述したり、描きわけたりする表現力や語彙が年齢的に不十分であった可能性も考えられる。

IV. まとめと今後の課題

第1に、分析対象に性差が認められた。男児では父親像をよく描いた。女児は男児よりも母親像をよく描いたことと遊んでいる場面を男児よりもよく描いていること、そして、その描画水準は男児よりも高い傾向にあった。月齢差は認められなかったことから、年長児という年齢幅の範囲内では月齢による影響はあまりないと考えられる。

第2に、本研究において設定した描画水準の基準は、人物像の動的要素の有無と絵からそれら動的要素

素を読み取れるかどうかにあった。動的要素を読み取る妥当性を客観的に表すことが難しく、この点の解決が今後の課題である。

第3に、本研究のKFDの活動内容は「散歩」「遊ぶ」「TVを見る」が上位3位を占めていた。先行研究の活動内容において、「TVを見る」「料理」「食事」は安息や休憩、団欒の象徴を示す一般的な活動内容であり、第1位か2位を占めていたのに対して、本研究における順位は低かった。とくに「料理」「食事」の出現が少ないこともあって本研究では検討できるに至らなかった。今後の課題としたい。また、活動内容の記録では、担任が本人から聞いた活動内容を記述するなど間接的な場合があった。活動内容の分類基準、分類方法を一般化できるように検討することが今後の課題である。

最後に、今回は集団でKFDを実施したが、年長児では「家族」「おうちの人」という通常の教示だけでは家族全員を描くことをイメージしにくかったのではなかろうか。したがって、幼児に対しては個別実施であっても、たとえば「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、自分、弟、妹、おじいさん、おばあさん」などと1人ずつの名前を挙げて、本人の理解に合わせた教示を行うことが今後は必要かもしれない。時には、集団実施よりも1対1かそれに近い形式での個別実施が望ましいと考えられる。今後の課題である。

謝辞

描画にご協力いただいた子どもたちと保育所の先生方、関係機関に深く感謝致します。

文献

- 1) Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972): Actions Styles and Symbols in Kinetic Family Drawings (K-F-D): Bruner/Mazel. New York. (加藤孝正他訳、子どもの家族画診断、黎明書房、1975)
- 2) 武藤久枝 (2011): 第3部4章、動的家族画、心理検査の実施の初歩 (願興寺礼子・吉住隆弘編)、ナカニシヤ出版: 89-98
- 3) 東山明、東山直美 (1983): 子どもの絵—成長をみつめて—保育社
- 4) 加藤孝正 (1999): 動的家族画 (KFD) の発達、臨床描画研究、14: 30-42
- 5) 日比裕泰 (1986): 動的家族描画法—家族画による人格理解—、ナカニシヤ出版
- 6) 山尾沙耶香、田中吉資 (2004): 幼稚園5歳児及び小学1年生の動的家族画—発達と家族への思い—、香川大学教育総合実践研究、9: 101-114
- 7) 市川緑 (2005a): 動的家族画の分析 (その2) —小学生臨床群の家族イメージ—、大阪経済大学論集、56 (3): 21-26
- 8) 松尾久枝、加藤孝正 (2012): 保育所年長児のKFDの特徴について、日本描画テスト・描画療法学会第22回大会抄録集: 60
- 9) 加藤孝正 (1985): KFDの臨床、精神科MOOK、10: 143-152
- 10) 加藤孝正 (2006): 第II部4章、家族検査法: 動的家族画法 (KFD) 心理査定実践ハンドブック (氏原寛他編)、創元社: 750-764
- 11) 市川緑 (2005b): 動的家族画の分析—小学生の家族イメージについて—、大阪経済大学論集、56 (1): 93-100
- 12) 加藤孝正 (1986): 動的家族画 (KFD)、臨床描画研究、1: 87-104
- 13) 市川緑 (2005c): 動的家族画 (KFD) の「様式」について—臨床群の特徴—、大阪経済大学論集、56 (2): 171-179

受付日 2012年9月28日

受理日 2012年10月22日

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of KFD at 6 years by children in nursery school. The KFD was carried out for 249 6-year-old children in nursery school in 2011. Three indices were used for the assessment of KFD: 1) Actions (drawing content), 2) number of humans drawn, and 3) KFD drawing level. One hundred sixty KFD (80 boys, 80 girls) were analyzed, and in complete drawings.

The results were as follows: 1) The mean age of subjects was 73.5 months.

2) Boys showed significantly higher scores than girls in drawing father figures (boys: 80.0% , girls: 65.0% , $\chi^2 = 4.51$, $p < .05$). Girls showed significantly higher scores than boys in drawing mother figures (boys: 66.3% , girls: 80.0% , $\chi^2 = 3.84$, $p < .05$). 3) KFD were divided into 3 classes. It was impossible to interpret actions from drawings in 62.5% KFD. 4) Actions appearing in the KFD and drawing content categories were “WALKING (16.9%),” “PLAYING (14.4%),” and “WATCHING TV (13.8%).” Sex differences appeared in KFD of 6-year-old children.

[Keywords] kinetic family drawings, nursery school children, actions